

村石 達哉 (ヴァイオリン) *Tatsuya Muraishi (Violin)*

5歳よりヴァイオリンを始め、武蔵野音楽大学、同大学院、ベルリン国立芸術大学に学ぶ。SFBラジオ第2放送、ドイツ、イタリア、スウェーデンにおいてリサイタルを開いた後、95～96年にドイツのオーケストラ「エルブランド・フィルハーモニー」の首席コンサートマスターを務め集客力がなかった楽団を再生し惜しまれながらも退任しその後ソロ活動に移りヨーロッパを中心にオーケストラと共演、音楽祭出演、客演指揮を行い99年に帰国し現在に至る。バロックヴァイオリンの奏者としても研鑽を積み、中国ツアー、米国ツアーを行った。バロック音楽の視点からの作品の演奏解釈を行いアカデミックな表現法を試みている。またそれが認められ2013年にはインディアナ大学の招聘を受け演奏。2015年より毎年ベルリンでのリサイタルを再開し、またオーストリアのオツタールで夏に行なわれている音楽祭のマスタークラスの講師を毎年務めている。

綿貫 舞乃 (ヴァイオリン & ヴィオラ) *Maino Watanuki (Violin & Viola)*

3歳よりヴァイオリンを始める。これまでに伝田充正、村石達哉、マリアンネ・ベッチャー（ベルリン芸大教授）、ハルトムート・オメツベルガー（ウィーン）の各氏に師事。ドイツ・ラインスベルクとオーストリア・オーバーゲーグルのマスタークラスに参加し、共にファイナルコンサートに出演する。15年、16年、17年、19年ベルリン及びオーストリアでのコンサートに出演し好評を得る。18年にオーストリアのグラーツにてヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲を室内オーケストラと共に共演した。メセナジュニアオーケストラを経てメセナ市民交響楽団のメンバー、コンサートミストレスを務める。現在、ウィーンと日本での演奏活動と共に後進の指導も行っている。T&M音楽企画の専属アーティスト。

クリストファー・聡・ギブソン (チェロ) *Christopher So Gibson (Cello)*

4歳よりチェロを始める。高校在学中にTanglewood, Indiana University, Interlochen の夏期プログラムに参加。横浜インターナショナルスクール卒業後、2005年に米イェール大学に進学、哲学・政治学を二重専攻。在学中、Aldo Parisotとのオーディションに合格し、イェール音楽院にてメニューイン氏との共演を果たしたOle Akahoshi氏にチェロを、Wendy Sharp氏に室内楽を師事する。2011年秋にイェール大学卒業後、哲学、文学、芸術を通して英語を教えると共に、チェリストとして東京・鎌倉を中心に活躍中。2012年冬、国際演奏家協会新人オーディションにてバツハ無伴奏ヴァイオリンパルティータで入賞した際、審査員の一人であるヴァイオリニスト川島成道氏から「曲の世界に入り込むことの出来る演奏」という賛辞を受ける。

山田 亜理沙 (ピアノ & チェンバロ) *Arisa Yamada (Piano & Cembalo)*

東京学芸大学G類音楽専攻卒業。ドイツにて研鑽を積み、武蔵野音楽大学大学院修了。スタインウェイ国際ピアノコンクール in Berlin 入賞、ベルリンフィルハーモニー室内楽ホールにて演奏。第35回鹿児島新人演奏会出演、最高位である県知事賞受賞。ポーランド国立クラクフ室内管弦楽団と共演。霧島国際音楽祭他、国内外のマスタークラスを多数受講。大学院在学中、古楽に興味を持ち、チェンバロと通奏低音を学び始める。ピアノを中野孝紀、丸山淑子の各氏、チェンバロを西山まりえ、オルガンを石丸由佳の各氏に師事。現在、室内楽や歌曲・合唱伴奏に積極的に取り組み、活動の幅を広げる傍ら、後進の指導も行っている。

Christmas Concert

クリスマス・コンサート



ピアノ四重奏の調べ

2020 12.21

長野市芸術館 メインホール

Program

コレッリ
クリスマス協奏曲 ト短調 Op.6-8

モーツァルト
ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 K.478

～休憩～

ハイドン
ロンドン・トリオ 第1番 ハ長調 Hob IV-1

リスト
愛の夢 第3番

ドヴォルザーク
『4つのロマンティックな小品』より第1楽章

サン＝サーンス
アレグロ・アパッショナート

マスネ
タイスの瞑想曲

サン＝サーンス
ピアノ四重奏曲 ホ長調



『クリスマス・コンチェルト』第8番 ト短調 op.6-8 コレリ

コレリは、バッハ、ヘンデル、ヴィヴァルディの少し前の時代に活躍したイタリアの作曲家です。彼自身ヴァイオリンニストだったこともあり、ヴァイオリンを中心としたソナタや協奏曲が主要な作品となっています。その中で最もよく知られているのが、この12曲からなる合奏協奏曲集です。今回演奏するクリスマス協奏曲はこの曲集の中でも1番有名な曲です。コレリ自身「キリスト降誕の夜のために作曲した」と書いているとおり、クリスマスの真夜中のミサ用の曲として作曲されました。そのためにこのタイトルで呼ばれます。ヘンデルのオラトリオ「メサイア」の途中でキリスト降誕の夜の雰囲気を表すために、パストラールという牧歌的な曲が入っていますが、このクリスマス・コンチェルトの最後の楽章も「パストラール」となっています。当時は、クリスマスの音楽といえば、パストラールだったようです。

ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 K.478 モーツァルト

この曲は1785年10月16日にウィーンでオペラ『フィガロの結婚』の創作の合間をぬって作曲され、同年の12月にウィーンのホテルマイスターから出版されました。モーツァルトは最初、出版社側から3曲のピアノ四重奏曲を作曲してほしいという依頼を受けました。アマチュアが家庭で演奏する音楽を出版し、ひと稼ぎしようという目論見でホテルマイスターが依頼したそうです。完成後、第1番を受け取った出版社側が「一般大衆には受け入れにくい難しい作品であり、誰も買おうとしないだろう」という苦言を呈したため、モーツァルトはその契約の継続を自ら解除し、連作の作曲を断念しました。結果的に、第2番は別の出版社アルタリアから出版され、第3作目のピアノ四重奏曲は作曲されることのないままに終わってしまいました。



ロンドン・トリオ 第1番 八長調 Hob IV-1 ハイドン

ハイドンは生涯で2回ほどロンドンを訪れていて、その2回目の滞在中に、彼の有名な交響曲「驚愕」「軍隊」「時計」を書いています。この「ロンドントリオ」シリーズは、その頃パトロンフルート愛好家の男爵と交流があり、彼の為に書いたのだろつとされています。オリジナルの楽器編成は、2つのフルートとチェロで書かれていますが、この時代の常で楽器編成は柔軟な方が楽譜の売り上げも良かったそうで、他の楽器でも演奏可能なように書かれています。今回はこのロンドントリオの中から第1番をヴァイオリン2本とチェロで演奏致します。

愛の夢 第3番 リスト

リストの作品の中でも最も有名な作品の1つです。元々は、ドイツの詩人フライリヒャルトの詩による独唱歌曲として作曲されましたが、1850年作曲家自身によりピアノ独奏用に編曲されています。「おお、愛しうる限り愛せ O lieb, so lang du lieben kannst!」で始まる歌詞は、恋愛のことではなく人間愛を歌ったものです。

4つのロマンティックな小品 ドヴォルザーク

1887年1月、ドヴォルザークが親しい友人たちと演奏しようとして作りあげた魅力的な作品がこの《4つのロマンティックな小品》です。大学生ヨゼフ・クルイスはドヴォルザークと同じ番地に住む若き友人であり、クルイスがヴァイオリンを学んでいたヤン・ペリカンはプラハ国民劇場の楽員で、同じくドヴォルザークの親しき友人でした。ドヴォルザークは彼らとの演奏を思い描きながらまずふたつのヴァイオリンとヴィオラのための《テルツェット》作品74を書きましたが、それはクルイスには少々難しすぎたため、そこでドヴォルザークは同じ構成で《バガテル（ドロブノスチ）》作品75aを書きあげ、再度のチャレンジとしています。《4つのロマンティックな小品》はこの《バガテル》をヴァイオリンとピアノ用に後にアレンジしたもので、3月30日、ドヴォルザークのピアノと名手オンドリーチェクのヴァイオリンにより初演されました。

今回はこの4つの曲の中から第1曲目を演奏致します。

アレグロ・アパッショナート Op.43 サン＝サーンス

1872年に作曲された有名なチェロ協奏曲第1番と同時期の作品とされています。1873年にサン＝サーンスの友人であったチェロ奏者ジュール・ベルナル・ラセール(Jules-Bernard Lasserre)によって初演され、ラセールに献呈されました。パブロ・カザルスが頻りに演奏したことで知られています。

タイスの瞑想曲 マスネ

ジュール・マスネ（1842-1912）はフランスのモンローに生まれ、25曲ものオペラを書いた多作な作曲家です。マスネは労働意欲に満ち、まだ日の高いうちに床に就き、夜明けよりずっと前に起きて仕事をしていたと言われます。その多くの作品群の中で現在も圧倒的に演奏される機会が多いのはオペラ『タイス』第2幕の間奏曲である「タイスの瞑想曲」です。『タイス』の舞台は4世紀のエジプト。古代キリスト教の修道僧アタナエルがアレクサンドリアで退廃と享楽の生活を送る娼婦タイスを救おうとして改心させたにも拘らず、アタナエル自身がかえってタイスの美しさの虜となり、墮落していくという物語。「タイスの瞑想曲」はアタナエルが信仰に生きるようタイスを説得した後、タイスの決心がつくまで戸口で待っている間に演奏される間奏曲です。楽譜には「religioso（宗教的に・敬虔に）」という指示があり、神の道に入ろうとするタイスの心の揺れを表す甘美な音楽です。マスネは当時のフランス大衆の好みを的確にとらえ、人気とそれに応じた経済的成功を手に入れました。こうした彼の作曲姿勢や名声に、相当の敵意と嫉妬感を抱いた同世代の作曲家達も多かったようです。

Program Note

ピアノ四重奏曲 木長調 サン=サーンス

サン=サーンスの公式な作品表に記載されているピアノ四重奏曲は有名なOp.41だけですが、今回演奏するこの木長調の曲には作品番号がついていません。これは彼がまだ学生だった16歳の時に作曲に取り掛かり、18歳の1853年に完成した作品で出版もされず長らくパリ国立音楽高等学院の図書館に眠っていた作品です。1964年にパリ国立図書館に引き継がれた後、やっと1992年になって出版された作品になります。チェロの美しい旋律から始まりヴァイオリン、ヴィオラがそれを引き継ぎ、段々と場面が激しく展開していきます。とても若々しく情熱にあふれた作品となっています。

第1楽章 ポコ・アンダンテ・マエストーソ - アレグロ・ヴィヴァーチェ

第2楽章 アンダンテ

第3楽章 アレグロ・コン・フォーコ

